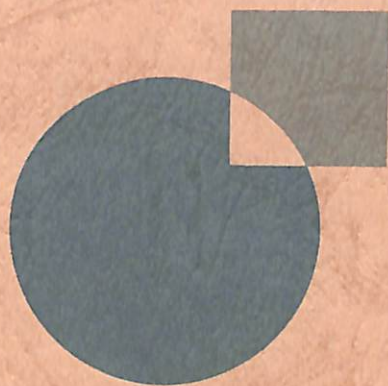


視覚障害者と大学

シリーズ1

■
門戸開放40年の歩み



日本盲人福祉研究会 盲学生情報センター

発刊にあたって

平成元年11月3日、本会は第20回博報賞と文部大臣奨励賞を受賞しました。本会発足28年目のハプニングでした。

「ハプニング」と申し上げたのは、微力な本会が複雑多岐な「盲大学生にかかわる問題」ととりくみ、わずかでも成果をあげ得たとすれば、それはひとえにご理解ある団体や関係者のご支援のたまものであり、それが「本会の実績」として評価され「賞」をいただいたからです。「完全参加と平等」という国際障害者年のスローガンをバックにしても解決のむずかしい「大学の門戸開放」「入学後の学習面での困難点の解消」「卒業後の職域の拡大」に一層努力するようにとの「はげましの賞」としていただきました。あらためて皆様にお礼を申し上げます。

年々、健常者の大学進学者は増えています。盲人の場合も例外ではありません。しかし、全国にある国公立の大学と短大合わせて1083大学（国立96、公立39、私立364、短大の国立41、公立53、私立490）のうち、点字による入試を認めている大学はその1割にしか達しません。

私たちが戦後、新憲法に保障された「教育の機会均等」をもち出すまでもなく、自然のなりゆきとして大学進学を実現した昭和24年は、たったの3大学でしたから名実共に現在の数は目をみはるものがあると言えるかも知れません。

しかし私たちは、健常者同様すべての大学にチャレンジできるような実態を近い将来に実現しなければならないと思っております。その意味からも改めて過去をふり返り、それをたたき台にして問題解決に取り組むことが重要であると考えました。

昭和24年に正規の学生として大学進学が盲人に認められてから40年という節目でその「あゆみ」を纏めることになり、「刊行委員会」（八王子福祉園の谷合侑先生、田中・出版、富田・大学進学、直居・調査研究の3理事と高橋）を設置し大綱をまとめ、執筆を谷合先生にお願いしました。

幸い、新日本友の会の出版助成をいただくことができ、このような貴重な

図書ができました。あらためて新日本友の会ならびに谷合先生にお礼申し上げます。

就職問題については後述しますが、大学に盲人が入学した以上、学習面の配慮は大学の責任であると思います。しかしこれらを強調しすぎますと、自然、大学側が点字による入試を躊躇することにつながりかねません。幸い、3団体が盲大学生を対象にした育英制度を設けていますが、この恩恵に浴する人たちは毎年入学者の4分の1足らずの学生で、それでもテキストや参考書をすべて点字または録音するという経費には及びません。

私は、近い将来このようなサービスを行なう公的機関を設置するか、国が委託事業として経済的助成をするような制度を働きかけています。それまでの間、本センターが理解ある助成団体やボランティアのお力添えをいただき、学生や大学等のニーズに応えていかなければならないと思っております。

その参考資料のひとつとして、今春視覚障害者が在籍ないしは在籍したことのある大学76校を選び「視覚障害学生に対する施設設備面並びに学習面における大学の配慮」についてのアンケートを行ないました。

これを中心に年末に出版したいと目下作業を進めております。幸い、安田火災記念財団の出版助成を得ましたので、この図書同様皆様に期待される図書をお届けできるものと思います。

最後に、大卒者を中心にした職域拡大についても社会福祉事業開発基金のご助成をいただき平成3年夏出版する予定です。

本会は平成3年7月、発足30周年を迎えます。これを記念して先の3書が相ついで日の目を見ることができればこれ以上の喜びはありません。

(盲学生情報センター所長 高橋 実)

目 次

まえがき	5
第一章 前史（明治時代末から昭和23年まで）	
1. 明治・大正期	7
2. 昭和前期	9
第二章 第1期 大学進学の開拓期（昭和24年から30年まで）	
1. 大学の門戸開放始まる	10
2. 日本盲大学生会の発足	12
3. 進学適性検査の点字受験をめぐる問題	16
4. 入学試験をめぐる問題	19
5. 在学中の勉学をめぐる問題	23
第三章 第2期 大学進学の後退期（昭和31年から39年まで）	
1. 昭和30年代の状況と大学進学者の減少	25
2. 日本盲大学生会の消滅	28
3. 文月会の結成	30
第四章 第3期 大学の門戸開放運動期（昭和40年から45年まで）	
1. 門戸開放運動始まる	32
2. 大学進学者の拡大	36
3. 昭和44年度の大学進学・就職状況	36
4. 入試・勉学・就職の体験手記	40
第五章 第4期 点字受験の促進期（昭和46年から51年まで）	
1. 5年間の活動の総括と今後の方針	45
2. 昭和46年度の大学進学対策委員会の活動	47
3. 昭和48年度の大学在籍者の状況と大学入試の問題点	48
4. 昭和50年度の大学進学と卒業生の就職状況	52
5. 大学進学希望者の推移（昭和46年から57年まで）	55
6. 大学進学者の推移（昭和46年から57年まで）	57
7. 大学種別・大学別進学者の推移（昭和46年から平成1年まで）	58
8. 入試・勉学・就職の体験手記	61
第六章 第5期 雇用促進運動の展開期（昭和52年から57年）	

1. 雇用促進全国大会と雇用連の結成	64
2. 国会請願署名運動	66
3. 大学卒業者の就業状況	67
4. 共通一次試験	68
5. 大学進学状況	72
6. 大学における専攻学科の種類とその推移	74
第七章 第6期 大学の門戸開放促進期（昭和58年から63年まで）	
1. 大学の門戸開放状況と問題点（昭和58年から63年まで）	76
2. 大学進学希望者の推移（昭和58年から63年まで）	82
3. 大学入学試験の問題点	85
4. 入試問題点訳作業の体験記	88
5. 大学進学者の推移（昭和58年から63年まで）	91
6. 学習の保障	96
7. 教材供給の態勢作りを	101
8. 現在の盲大学生奨学金制度	103
9. 大学卒業後の進路・就職状況（昭和58年から63年まで）	104
第八章 日本盲人福祉研究会と全国視覚障害者雇用促進連絡会	
1. 日本盲人福祉研究会（文月会）の組織と運動	112
2. 全国視覚障害者雇用促進連絡会（雇用連）の組織と運動	113
あとがき	115
卷末資料 1. 歎願書	120
2. 第一回全国盲大学生大会開催要綱（抜粋）	122
3. 点字受験が認められている大学一覧	124
4. 入試問題点訳要領	125
5—① 日本盲人福祉研究会（文月会）の事業概要	131
5—② 日本盲人福祉研究会（文月会）規約	132
5—③ 『盲大学生を支える会規則』	136
5—④ 盲学生情報センターの過去・現在・未来	138
6. 「大学の門戸開放」運動略史	142
7. 視覚障害者雇用促進連絡会規約	145
8. 「視覚障害者の雇用促進」運動略史	146

まえがき

新制大学制度になってから、視覚障害学生が大学に入学したのは、昭和24年が初めてであった。この時、同志社大学、早稲田大学、日本大学の3校が、盲学生を受入れた。それから40年が経過し、昭和63年現在で、視覚障害者に門戸を開放している大学は、短期大学を含めて110校に達している。この40年の道のりは、まことに遠く厳しいものであった。

はじめ盲学生たちは組織を持っていなかった。大学に対する点字受験の交渉、入学後の点訳・朗読ボランティア探しなど、みな個人でせざるをえなかった。昭和26年9月、日本盲大学生会が結成され、門戸開放運動・学習権の保障運動などを展開したが、組織上の弱さから昭和33年には、活動ができない状況となってしまう。この後4年間は、盲学生たちは相互の情報がえられず、孤立した厳しい冬の季節を過ごすことになる。

昭和36年7月、大学を卒業したOBを中心に、組織の再建が図られた。大阪において「文月会」（昭和39年7月、日本盲人福祉研究会（文月会）と改称、以下、「文月会」という）が結成されたのである。この会が、大学の門戸開放運動に本格的に取り組んだのは、昭和40年からであった。大学の門戸開放運動は、盲学生の教育基本権獲得の闘いであり、学習権保障の闘いであったが、さらにこの運動は、「教育」問題にとどまらず「職業」問題と密接不可分のものであった。文月会は、大学進学対策委員会と同時に、就職対策委員会を設け、この二つの課題に当初から取り組んできた。しかし、一つの団体がこの二つの大きな課題に取り組むことには、限界があった。職業問題を専門的に取り組む組織が必要である。運動の経過の中で、このことが痛感されてきたのであった。

この願いが実現したのは、昭和52年8月であった。「文月会」と全日本視力障害者協議会（全視協）との共催によって、「視覚障害者の雇用を進める全国大会」が開催され、さらに両団体によって「全国視覚障害者雇用促進連絡会」（雇用連）が結成されたのである。ここに「大学の門戸開放」の運動体と、「雇用促進」の運動体との、車の両輪が整ったことになる。

この車の両輪は、現在もなお絶え間なく回転しつづけている。大学の門戸

開放は100校を越え、職業問題の打開も徐々に進みつつある。しかし、運動の成果は微々たる量的変化にとどまっており、行政サイドの抜本的な制度改正を伴う、質的变化にまで至っていないのである。

本書は、「視覚障害者と大学」の40年のあゆみを、「大学の門戸開放」運動を中心に6期にわけて検討・考察してみたいと思う。特に、正確な資料を数多く収録すること、体験記によって当時の生々しい状況を検証すること、の2点に留意して編集・執筆したいと思う。

1990. 2. 編集責任者 谷合 侑

第一章 前史

(明治時代末から昭和23年まで)

1. 明治・大正期

【視覚障害者の大学進学は明治末から始まる】

視覚障害者の大学進学は、明治時代の末から始まっている。すなわち、明治33年、^{よしもとただす}好本 督 氏が東京高商（現一ツ橋大学）を卒業し、同34年、^{かずお}大橋五男氏が同志社神学部を卒業しているが、兩人ともこの時は弱視であった。全盲者をはじめて受入れた学校は、九州学院神学部（熊本）で、明治44年、石松量蔵氏が入学している。彼は自叙伝『盲目の恩寵』の中で、次のように述べている。

「今や私は決心した。私は牧師に依頼して、入学の日を待つこととなった。ちょうどその日、佐賀の県庁から通知があつて、東京盲学校師範科入学の推薦状を請求せよといつてきたが、これを断つて、しばらく鐘崎にとどまり、説教所で働くこととなった。かく万事が決定したとき、私は盲人を教育するに、必ずしも師範科へ入学する必要のなかったことを覚った。（中略）明治44年の秋、10月17日は、私が九州学院神学部に入った日である。（中略）勉強の方法を定めるために、私は2・3日聴講したが、ほぼ見当もついたので、これからは毎日教室へ出て、学友と共に勉学することとなった。教授からも多大の同情と、いろんな便宜があたえられて、私は案外容易に勉強することができた。講義を点字で筆記することを許されたので、さしたる苦心もなくすんだ。ただ、語学は教科書がないため、言い難い不便を感じた。そこで、私は英国から点字の原書を取り寄せて、学友とは別個の語学勉強法を取る外はなかった。試験は点字で答案を書いて、直ちに別室で教授の前で朗読した。」

こうして、彼は4年間の勉学を終え、大正4年6月、ルーテル神学校第1回卒業生として、世に出たのである。

【同志社大学への嘆願書】

大正2年、熊谷鉄太郎氏が関西学院神学部へ、聴講生として入学した。そして同4年、岩橋武夫氏が関西学院文学部へ、正式な学生として初めて入学することになる。九州学院を卒業した石松量蔵氏は、大正5年、早稲田大学

文科哲学科の聴講生となり、2年間に在学した。同6年、鳥居篤治郎氏は同志社大学に入学受験の嘆願書（「文月会20年のあゆみ」に収録）を提出したが、ついに門戸は開かれなかった。嘆願書の全文は、巻末資料1として掲載した。彼の失望は計り知れないものがあつたが、この成果は、戦後の新制大学制度になって実ることになる。

【盲女性初めて大学に進学】

大正7年、東京女子大学は盲女子にはじめて門戸を開いた。同校は開校と同時に、全盲の斎藤百合氏が予科へ入学することを認めたのである。彼女は入学後、本科英文学科→高等学部→大学部英文学科と進学し、5年間余りに在学した。

彼女の入学当時のようすを、『光に向って咲け——斎藤百合の生涯』（粟津キヨ著、岩波新書）に、次のように述べられている。

「当時はまだ盲青年の大学入学も、ほとんど認められていなかった。まして百合は盲女子であり、その上主婦であり、大正5年8月に長女久美が生まれていたから、幼児を持つ母でもあつた。年も28才になっていた。経済的にも決して裕福とはいえない。そのような不利な条件ばかりそろつた中で、“盲婦人の地位向上”という熱情だけを、ただ一つふりかざしてみても、入学を認められるはずはない、と思わぬわけでもなかった。しかし夫は、『やれるだけやってみるんだね』といって、百合の無謀としか言いようのない、女子大学への望みに理解を示し、励ましてくれた。（中略）入学試験は口頭で行われた。面接の時、学長代理の安井てつ学監は、いきなり言った。『ここは、勉学の意気に燃えているお嬢さんたちの集まる所です。結婚しているめくらの女が、大きなお腹にでもなったら、どんな勉強ができるというのですか。』覚悟はして来たのだったが、こんな言い方をされようとは思わなかった。しかし、こうまであからさまに言われると、彼女の気持ちはかえって落ちつき、相手が聞いているかどうか、どっちを向いているのかもわからなかったが、言いたいことだけは言おうと思った。盲女子の置かれている社会的地位がいかに低いか、それを高めるために、一人でも二人でも高等教育を受けたい、いや受けなければならないのです、と百合はしゃべるだけしゃべって帰ってきた。それから1週間後、東京女子大から『特別生として入学を許可する』という

文面の速達便が届いた。すでにあきらめていた百合は、その手紙を胸に抱いて、声をあげて泣いた。」

大正期に大学へ進学した盲女性は、彼女一人であった。昭和18年には、金井キヨ氏が斎藤百合氏のすすめで、東京女子大学高等学部へ入学している。

2. 昭和前期

【関西学院大学盲学生のメッカとなる】

昭和3年、関西学院は同校を卒業した岩橋武夫氏を講師に迎えた。彼は宗教哲学・英文学を担当するが、これを契機として同学院は、意欲ある盲学生達のメッカとなった。同4年、大村善永氏が文学部英文科に入学する。同7年、関西学院は専門学校から大学へ昇格する。同10年、瀬尾真澄氏が神学部へ、同11年下沢^{まさし}仁氏が神学部へ、本間一夫氏が文学部英文科へ、同12年、高尾正徳^{まさのり}氏が文学部社会科へと相次いで入学し、岩橋教授の薫陶を受けたのである。

本間一夫氏は、入学当時のようすを、自叙伝『指と耳で読む』（岩波新書）の中で、次のように語っている。

「盲学生が全部で30数人という小さな函館盲啞院から、盲教育とは何のかわりもない天下に名だたる関西学院を志すということは、文字通り井の中の蛙が大海を望むにも等しいことでした。これこそ一大決心が必要だったわけです。まず最初の心配は、入学試験をどういう形で受けさせてくれるか、ということでした。しかし、学院側もかなり綿密な調査をしていたらしく、実際は口頭試問を主とする人物考査に重きがおかれ、思ったよりも簡単な試験で終わりました。（中略）1年生の時は教科書を友人に読んでもらって、それを全部点字で書き、自分で教科書作りをしました。しかし、それだけで一日に数時間が必要で、本当の意味の勉強をする時間がとても取れないのです。これではダメだと気づき、2年生の時からは東京の小林隆平さんをお願いして、点字用紙1枚4銭または5銭で、点訳してもらいました。これは経済的に相当の負担であったばかりでなく、東京と関西との往復郵便にも手間どり、授業に間に合わないことも再三でした。」

この頃、関西学院大学と東京女子大学は、盲人に理解をしめす数少ない大学であったといつてよい。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

出版助成

社会福祉法人 新日本友の会

視覚障害者と大学
シリーズ 1
門戸開放40年の歩み

実費頒価 1,000円 (送料 260円)

発行日 1990年12月1日

編集・発行 日本盲人福祉研究会盲学生情報センター

〒166 東京都杉並区成田東5丁目36番15号

電話 (03) 3220-1421

振替口座 東京 6-16103

印刷所 コロニー印刷